

1. 事業の概要

本研究では、基礎的・基本的な技術・技能の習得に加え、高度かつ応用的な知識や技術に触れさせ刺激を与えていくことで、これまで以上に福祉や介護への強い情熱と高い誇りを有し、同時に自らの知識・技術・技能に自信を持って地域福祉に貢献できるケアワーカーを育成することを目的としている。ソリューションフォーカスとは、「課題解決志向」ともいわれ、原因分析にこだわりすぎず、ニーズに対して肯定的な未来イメージを持ち、実行可能な具体的解決行動を先行させる思考法ないしはコミュニケーション手法のことである。

ソリューションフォーカスの視点に立ち、介護サービス利用者（以下、利用者という）の課題を的確に判断しながら、利用者の生活をより良くする「利用者本位の介護」を生徒が主体的に考え、困難な課題にも協働して解決できる能力を養うために「気づく⇒考える⇒解決策⇒実施」させる取組を行ってきた。

2. 具体的・特徴的な実践内容

(1) ソリューションフォーカスの視点に立つケアワーカーの育成方法の研究

「利用者本位」の考え方を獲得し、介護の技術や技能に自信を持った人材を育成するためには、介護の技術に関連した「コミュニケーション技術」「生活支援技術」「介護過程」の3科目を連動させ基礎・基本を学び、「介護実習」で応用する力を付けさせる必要があると考えた。重要となる利用者を観察する視点を獲得させるための教材や指導法、評価法を開発し、生徒に基本技法・分析技法・専門技法の3つを習得させていった。

1つ目の基本技法は、見たり聞いたり話したりする中で相手の立場を理解できるように『感性』を豊かにする。そのためには、観察や傾聴、自己の考えを表現する技術を磨き、利用者から必要な情報を収集して的確に記録・整理し、利用者が今をどのような気持ちで暮らしているのかを考えさせることができるように指導していく。これは利用者のこころとからだの痛みを知るきっかけにもなる。

2つ目の分析技法は、基本技法で集めた情報から、その人の思いや考え方の傾向を見つけ出し、利用者にとって何が課題となっているのかを分析し、把握する。利用者の課題を的確に見つけ出すためには、介護全般における基本的な知識・技術の習得が必要になってくる。

3つ目の専門技法は、分析技法で見つけ出した課題に対する介護計画（目標や支援内容、方法）を作成し、実施、評価する。介護実習で基本技法・分析技法の学びを繰り返し行い、ICFの観察法や24時間生活シートを用いて利用者の生活課題が可視化され、生活課題の改善や解決の糸口が見えてくる。

さらに、基本技法、分析技法、専門技法をより効果的なものにするために、兵庫県立教育研修所と連携し、自宅でもパソコンやスマートフォンから介護技術動画が閲覧できるシステムの活用や、本校の電気情報システム科との連携によるICTを活用した授業研究も実施している。授業では、生徒は介護の動画をタブレットに保存し、自分たちが行っている介護方法や声かけの方法を分析し、他の生徒と情報を共有でき、振り返ることができる。また、自宅でも、動画を活用して予習・復習を自主的に繰り返し行うことができる。



(2) ピアスーパービジョンにより、自主性・主体性を育てる方法の研究

外部の異年齢、障害のある方など多様な方々との交流を通して、言葉遣いや表現方法、表情など、相手に合わせた円滑なコミュニケーション能力を身につけることができる。また、これらの行事を生徒たちが協働・連携して企画・運営することで、生徒の自主性、主体性や自己有用感や自己肯定感を育むことができる。このように「チーム」「協働」「コミュニケーション」に焦点を当て、総合

福祉科の数々の行事を、生徒たちの企画・運営により実施している。



①学校デイサービス

文部科学省の「目指せスペシャリスト事業」で指定を受けた12年前から継続して実施している学校デイサービスは、総合福祉科全学年が参加する行事で、3年生が3年間の学びの集大成として企画・運営を全て行っている。各パートリーダーやその他の盛り上げる役割など、生徒それぞれが役割を持つことで、生徒は自ら進んで物事に取り組んでいく。

②介護教室

小中学生・高齢者文化大学との介護教室は、総合福祉科2年生が担当している。ここでは、他人に自分たちの学びや思いをわかりやすく伝える難しさを体感する。全体の総括リーダーが中心となり、介護教室に参加する

小中学生の人数は担当する2年生とほぼ同数、高齢者文化大学生に関しては担当の2年生1人が高齢者2、3人を担当して介護を教える。全員が役割を持ち、どうすれば内容がうまく伝わり、参加者に喜んで頂けるかを話し合い、「教える知識と技術をクラス全員で標準化すること」を目標に取り組む。

③特別支援学校との共同学習

特別支援学校との共同学習は、特別支援学校の生徒と卒業後に共に介護現場で働くことを想定して3年生が取り組んでいる。2年次に特別支援学校へ見学実習に行き、生活の様子を知り、障害への理解を図る。3年次には、マナーやベッドメイキング等の実技指導を、生徒が企画・運営し、共に学ぶ。生徒は、相手を理解して共に学ぶ楽しさと物事をわかりやすく伝える難しさを体感している。この活動を通じて、障害のある人に対する教育や支援に興味を持ち、進路を決定した生徒もいる。

④ウエルフェア・コレクション（障害者ファッションショー）

Welfare-Collection（障害者ファッションショー）は、3年生が本校の他学科と連携して実施している。リハビリテーションセンターの利用者と交流し、利用者の思いやニーズを捉え、衣装や小物のアイデアを考えていく。当初は先輩の真似や先生の指示で動くなど、自分たちで作り上げようという意識や自主性が見られなかった。しかし、利用者や外部の方々との衣装制作の打ち合わせを重ねるうちに、自主的な言動や意見交換の機会が増え、ショーの実施後には生徒主体の反省会を行ない各役割の反省点と改善点を出し合うことで、次のショーの成功に向けて内容を改善していく様子も見られた。

総合福祉科の各行事では、本校の他学科との連携をはじめ、兵庫県、たつの市、社会福祉施設、社会福祉協議会等の官民との連携協力を深化させている。

(3) 介護の質を高める医療的ケアのための「生活支援技術」指導法の研究

法改正に伴って介護福祉士が「痰の吸引と経管栄養」（以下、医療的ケアという）を一定条件でできるようになった。本校でも2013年度から医療的ケアの学習をスタートさせている。命に関わるケアのため、より専門的な知識と技術が必要であるが、介護福祉士を目指す高校生への医療的ケアの効果的な指導方はないため、指導法のマニュアル作成を行った。

授業の中で前時の復習と知識の定着、生徒の理解度把握のために小テストを行い、間違った項目について自己学習する学習ノートを作成し知識を定着させる。また、技術の定着のために、手技の確認だけでなく、身だしなみ、声かけ、安全の配慮等の項目を加えるなど、チェックシート（実技評価シート）の改良を重ね、生徒同士でもチェックシートを用いて評価できるようにすることで、生徒が練習を自主的に重ねられるようにした。生徒たちは、演習項目の技術習得だけでなく、喀痰吸引や経管栄養を行うにあたって、利用者に対してどのように支援することが最適であるのかを考え、仲間とともに切磋琢磨し、取り組むことができた。

また、アクティブラーニングの手法を取り入れ、講義と実技の関連化を図った。実技を行うために、座学部分から関連させた内容でアクティブラーニングの手法を取り入れた授業を展開



し、生徒の学習意欲や理解等の向上につながった。授業後にはアンケートを実施し、生徒の理解度を把握するとともに授業の組み立てを考え直して、指導法のマニュアル化を図った。

これらの取組により、知識や技術の指導だけにとどまらず、支援の中で個人の尊厳や利用者心理を理解させ、福祉の理念を十分踏まえた授業を行えるようになった。

(4) 高度な介護技術を習得させるための指導法の研究

3年間という短期間で生徒により大きな刺激を与え、福祉や介護への興味関心を高めさせ、より意欲的な態度を育てるために、上記(1)～(3)における基礎的、基本的な介護の技術獲得に加え、高度で応用的な介護の技術に触れさせる。

①「楽ワザ」介護技術研修

利用者の思いを尊重し、持っている力をうまく使ってサポートする技術である「楽ワザ」介護の講義や実習は、自分のやりたいことを諦めていた利用者に、やりたいことを叶える内容であった。利用者が元気になられた取り組みから、生徒の技術習得への意欲が更に高まった。また、生徒たちは「楽ワザ」介護技術を基本にして、体格差などによって方法を工夫することでより楽に介護ができるオリジナルの技術を生み出し、その方法に「龍北カイゴ」と名付けて練習を繰り返している。これは、利用者の状態や体格差に対応した介護技術であるため、卒業後も介護現場でよりよい介護方法を探求し続ける介護福祉士になることが期待できる。また、小中学生や高齢者への介護教室や文化祭でもこの「龍北カイゴ」を取り入れ技術を伝えることで、生徒は、介護の知識や技術を伝えるためには自分たち自身が十分に理解し、技術を習得しておく必要があることがわかり、練習を重ねることでクラス全員の技術の習得につながった。



②介護コンテスト

兵庫県内の福祉を学ぶ高校生が、介護の技術を競う大会である介護コンテストは、生徒同士が切磋琢磨し、介護の技術とコミュニケーション技術を磨き、高め合うことができる。介護コンテストに参加するために生徒たちは、タブレットを活用して、互いの介護を何度も振り返りながら、支援方法やコミュニケーション技術を確認した。介護者として主体的かつ協働的に質の高い介護を目指し議論し合うことで、仲間同士の絆も深まった。大会当日は生徒は他校の介護技術を客観的に見ることで刺激を受け、その方法を自分たちの介護に応用して、更に介護の技術を向上させたいという意欲も湧いていた。介護コンテストは、本校だけでなく兵庫県で福祉を学ぶ高校生の介護への興味、関心を高めるだけでなく、介護の技術の底上げにもつながっている。

③排泄介助研修会

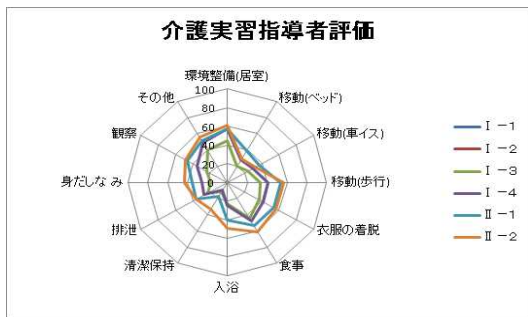
排泄介助の研修会では、オムツの性能や用途、利用者の状況、状態に合わせたオムツの選定方法や漏れを防ぐための方法などの専門的知識を、花王のメディカルケアサポートグループの方に実技を踏まえて教えて頂いた。オムツ交換における利用者の精神的負担を軽減させるため、より利用者本位の介護、寄り添う介護を考えた。排泄介助は利用者にとって羞恥心や自尊心に関わる非常にデリケートな介助であり、介護職にとっても負担の大きい介助だからこそ、利用者に安心して気持ちよく生活して頂くためにも、この研修は大変有意義である。

これらの高度な介護技術の習得は、より高いレベルを目指すことになり、生徒の興味・関心を高め、学習への意欲向上につながった。

3. 成果と今後の課題

(1) ソリューションフォーカスの視点に立つケアワーカーの育成方法の研究

生徒は、4つの科目を一体的に学びながら、介護過程で一番大切な利用者のアセスメントを行う模擬演習を多く実施してきた。その中で、「基本技法」(見て聞いて考えて利用者の情報を集める)、

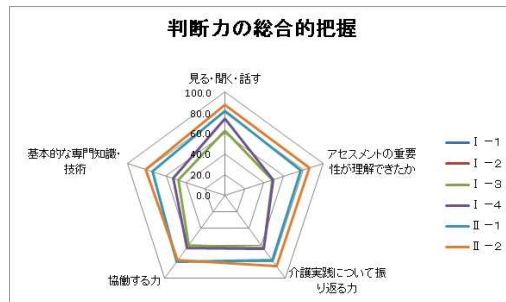


(グラフ1)

むため、初めての施設であっても各実習生の介護の技術・技能の段階が分かり、指導がより充実したものとなった。

②判断力（基礎力・思考力・実践力）評価の活用

利用者本人をはじめ他職種の意見を積極的に聞き、多くの要望や考えを調節していく能力を評価するため、(ア)見る・聞く・話す、(イ)アセスメントの重要性が理解できたか、(ウ)介護実践について振り返る力、(エ)協働する力、(オ)基本的な専門知識・技術の5つの観点で生徒の判断力（基礎力・思考力・実践力）を総合的に評価した。（グラフ2）



(グラフ2)

③形成的評価の活用

「コミュニケーション技術」・「生活支援技術」・「介護過程」の3科目を連動した「課題研究」の中で、利用者のアセスメントや介護計画立案をグループごとに行い、各グループに担当教員が付いて、「形成的評価」をしながら段階的に指導を行い、クラス全員が的確な介護過程を展開できるように「ケアの標準化」を行った。

④成果と課題

これらの3つ評価から生徒の成長が目に見える形で実感できた。また、習得した能力を評価するための観点をまとめ「見える化」を図り、生徒、教員、実習指導者全員で共通理解ができるようにしたことにより、生徒の状況把握や生徒自身の自己評価がより簡単に、客観的にできるようになった。

今後は、利用者本位の介護とその根拠にとどまらず、説明責任やリスクマネジメントの学びを加え「介護の技術」の自信や「介護のこころ」をさらに成長させ、「人の心を動かす」介護福祉士を育てていきたい。

また、Web ページでの介護技術動画の常時閲覧については、自主学習による技術習得や意識向上の効果が高いことから、さらに事前・事後学習を活発化させるとともに、他校や福祉施設とも共有したいと考えている。

(2) ピアスーパービジョンにより自主性・主体性を育てる方法の研究



各行事への取組状況を見ると、課題であった準備段階における生徒同士のコミュニケーションや協力・協働が活発にみられるようになった。生徒は、与えられた役割を実行するだけでなく、自分たちで作り出していく取組を目指す行動が見られ、リーダーはリーダーとしての自覚が生まれ、他の生徒もフォロワーシップを発揮し、積極的に自分たちで話し合い、協力し合う姿が明らかに増えるなど、自主性・主体性が育っている。行事後の振り返りにおいても全体の成功に対する喜び、そこに貢献できた喜びや満足感が現れることが多くなり、自分自身の変化、

成長を実感できる取組となっているように感じる。その他にも、臨機応変に対応する力、課題解決やサポートする力、異年齢交流で得たコミュニケーション能力や、参加者からの感謝や喜びの言葉がけによって達成感や社会的有用感を感じることができた。

しかし、現在は限られたメンバーがリーダーで活躍しているため、クラス全員がリーダーになれる資質を育てることで、将来の福祉の現場でのリーダーとなれる生徒を育てていきたいと考える。

そして、自分の役割を一人ひとりが理解し、チーム全体で協力・協働できるように指導していきたい。

(3) 介護の質を高める医療的ケアのための「生活支援技術」指導法の研究

生徒のアンケートや実習記録、小テスト等により、生徒の理解度や教授の成果が明確となり、それらを踏まえた上で次の授業に取り組むことができた。また、小テスト実施後の学習ノート作成により、前年度と比較しても、全体的に平均点が上昇するなど、知識の定着と意欲の向上が見られた。更に、アクティブラーニング手法を活用した授業により、知識・技術だけでなく、利用者に対する配慮や様々な気づきも一層できるようになり、多大な成果が見られた。



今後は、更に教材に指導上の留意点・ポイントなどの改善・工夫点等を盛り込み、より教授しやすい教材にして全国に広めていきたい。また、指導マニュアル作成により個人の尊厳や寄り添う介護等を十分踏まえた医療的ケアの授業が行えるようにしたい。

(4) 高度な介護技術を習得させるための指導法の研究



利用者の持てる力を活用して介護する「楽ワザ介護」技術の研修を通じて、生徒同士が互いに切磋琢磨しながら放課後や長期休業中に自主的に練習に取り組むなど、生徒はさらに福祉・介護に興味・関心を強く持ち、技術を習得しようと意欲的に取り組むようになった。また、教員にとっても最新の介護の技術を習得でき、授業で生徒の理解度を形成的評価しながら、介護に対する考え方や技術の定着に努めることができた。生徒が利用者に応じて元気にする「龍北カイゴ」を検討、開発したことで、高い技術と自信、誇りを持って社会に羽ばたけると考える。

今後は、福祉を学ぶ県内の高校生にも本校のHPやWeb授業等を通して、同じ技術を学ぶ機会を提供することで、県内の介護を学ぶ高校生のケアの標準化が実現できればよいと考えている。そうすることで、高校で学んだ介護の知識と技術が現場に伝播され、兵庫県全体の介護の統一化につながると考える。

介護コンテストを通じた取組では、生徒同士が切磋琢磨し競い合いながら、介護の技術力、コミュニケーション力の向上が見られた。クラスメイトも実技の練習や利用者役にアドバイザーとして参加しており、仲間同士の絆も深まっている。

しかし、年々出場希望者は増えてはいるものの、クラス全員の介護力や意識の向上にはつながっていないため、クラス全員に広がるよう工夫していく必要がある。

排泄介助研修会（オムツ交換介助）は、介護実習で現場の排泄介助の現状を見てきており、自分たちなりに排泄介助を良くしたいという思いもあり、非常に関心が高く有意義な研修会となった。今後は、現場で必要となる「オムツ外し」のための知識・技術についても高度な介護の技術と関連させながら回数を重ね、より専門的な知識・技術の習得につなげていきたい。



今後は、最新の介護技術や福祉機器の見学、新しい取組を行なう介護福祉施設等の見学を実施し、さらに生徒の知見を広め、福祉や介護への興味関心を高めていきたい。そして、感受性の豊かな高校生の時にしっかりと「利用者本位の介護」を考える機会を与え、今の福祉の現状をより良くする方法を考え続ける、探究心の強い介護福祉士を育てていきたい。